

毛越寺：常行堂と法華堂の跡

高床式の廊下でつながっている 2 つの正方形の形をした瞑想用のお堂がかつてこの場所に建っていたが、1573 年の火災で焼失しました。常行堂は南に、法華堂は北側にありました。2 つのお堂は京都の近くにある天台宗の寺院である延暦寺を模してつくられたものです。

毛越寺の僧侶たちはここで瞑想を行い、法華経を經典とする天台宗の教えを実践しました。常行堂では天台宗独特の「三昧」と呼ばれる瞑想を行いました。僧たちは、多くの場合阿弥陀如来（無限の光と生命の仏陀）の像を中心として、輪になって延々と歩き続けます。法華堂での瞑想は、その名前が示す通り、法華経の黙想を中心としたものでした。

発掘調査では、法華堂の礎石だけが発見されました。23 個の礎石が、今ももともとの配置のままの形でここに見ることができます。常行堂の礎石のうちの一部は、1700 年代に常行堂が再建された際に再利用されたものと考えられています。再建された常行堂はこの場所の西隣に建っており、今日でも瞑想の儀式に使用されています。